ミャンマー連邦における結核実態調査（X-ray撮影支援）に参加して

複十字病院 放射線科長 秋山 洋一

JICAからの要請で平成17年12月１日から16日までの約２週間ミャンマー連邦に赴き，結核実態調査に関するX線撮影技術指導をしてまいりました。具体的には，結核予防会愛知県支部から寄贈されたX線検診車の使用方法や一般的な原理・胸部撮影における留意点・自動現像機の組み立て方や使用上の留意点・トラブル対策あるいはフィールドでの実践練習などといった内容です。

ミャンマー連邦って？

ところで皆さんミャンマーってどの位知っていますか？ もちろん結核研究所の国際部の方たちはよくご存知でしょうが，今までの僕のイメージは「アウン・サン・スー・チー」「軍事政権」「ビルマの竪琴」「アジアのどこか」位しか浮かびませんでした。おそらく大半の方もその程度だと思いますが !? ミャンマーはインドや中国といった地域大国と国境を接し，隣国のタイとは長年戦いを繰り返してきた経緯を持ち，最近ではアメリカからも名指しで批判されるなど国を取り巻く政治状況は厳しく，国内経済は破綻に近い状況です。それでも人々は素朴で驚くほど親切です。まるで30年程前の日本のようでした。

首都はヤンゴン。季節は２月下旬から５月中旬の乾期と，５月下旬から10月中旬の雨期，10月中旬から２月中旬の涼期の３つに分かれます。僕が行った12月の上旬は一番いい時期だったようで，朝晩は日本の初夏のように涼しく過ごしやすいですが，それでも日中は35℃を越えて日差しが厳しかったです。街には本当に大きな木がいっぱいで緑があふれています。ヤンゴンの街中は車の交通量が多く，そのほとんどが古い日本車で，そのせいか初めて訪れた国なのに違和感がありませんでした。

黄金に輝くシュエダゴン・パゴダ。ここにお参りに来るときはどんな人でも裸足でないと入れてもらえません

宗教は90％が仏教で，国中に点在する仏教遺跡など見所にも事欠きません。特にヤンゴン市内にはパゴダという巨大な仏塔が数箇所あり，中でもシュエダゴン・パゴダは黄金に輝く最大のもので，2,500年前から建てられたといわれるミャンマーの聖地でありシンボルです。

訪れる10日位前に宿泊予定のホテルの前で爆弾テロ？（死傷者ゼロだったので「?」）があり，また首都移転の噂もあるなか間違いなく治安は悪いだろうと思っていましたが，敬虔な仏教徒が多いせいか？ビックリするぐらい昼間はのんびりしていて，夜一人で出歩いても安全な街でした。

途上国での活動

出発する前，小野崎先生（結核研究所国際協力部副部長）との打ち合わせでは「実際のサーベイでは検診車と可搬型装置との二班で行うので，それぞれの装置について指導をして欲しい」と言われ，両方準備して行ったのですが，およそ２ヵ月前に船で送った検診車は事務所に届いていなかったし，可搬型装置に至っては，出資先より予算がつかないということで，購入されませんでした。（編者注：小野崎先生は４月１日から結核予防会国際部長）この時点で僕の目標は修正させられ，半分は視察や関係機関への表敬訪問になりました。更に，吟味して発注したフィルムは違うものになっていたし，暗室は購入されておらず地元の医療機器取扱店に交渉して急遽作ってもらいました。小野崎先生がおっしゃるには「途上国での活動というのはこういうもので，事前に準備した物が予定通り届かないなんてことは日常茶飯事で，まずは我々のようなスタッフが到着してからようやく物事が進むんだよ」との事でした。やはり，日本のように物が溢れていて頼めばすぐ手に入るような環境とは大きく違うことを思い知らされました。

現地のスタッフの活躍

まずは何といってもNTP（National Tuberculosis Programme）の所長であるウィン・マオ先生や副所長のエイ・トゥン先生を始め，スタッフたちに感謝とこのプロジェクトを成功させるぞという気迫を感じました。中でもエイ・トゥン先生は我々の滞在中の要求などに対して，嫌な顔一つせずに親切にサポートしていただきましたし，タンダー・ルィン先生は，細かい打ち合わせを通じてコミュニケーションを取ることでスタッフの意識を高め，穴の無い準備とリーダーシップを発揮していました。また，ここには２名の放射線技師がいますが，初めて見る検診車や自動現像機に興味津々で，僕の話を聞き逃さないようにする姿勢や相次ぐ質問攻めに真剣さが伝わってきて，熱いものを感じました。それと，スタッフの多くはもうひとつ仕事を持っています（生活できない！）ので体力的にも大変だと思います。それでもみんなこのプロジェクトの重要性がわかっており，ひとつの目標に向かってそれぞれが出来ることのベストを尽くしている，そんな姿を見てきっとこのプロジェクトは成功すると確信しました。

手作りの暗室と自動現像機で，写真の出来が気になります。その向こうにあるのが検診車です

オープニングセレモニー！

12月８日にヤンゴン市内にある看護大学の教室をお借りして，マンダレー管区のスタッフと合同でこのプロジェクトの開会式が行われました。そのときヤンゴン管区保健局の副局長（予定では局長だったが，急な首都移転に伴い各関係機関のトップはピンマナに強制召集させられた）が挨拶で，「1966年からTB対策を行いましたが，1994年に行ったTB実態調査（喀痰検査のみ）では約８万人が罹患しており，その後対策は進んだがそれ以来実態調査は行われていない。また，現在TB患者の4.5%がHIVに罹患しているとの報告があり，このプロジェクトの重要性を再認識し…」と言っており，現状を正しく把握することが急務であると改めて感じました。

この後12人の技師と６人の医師にこのプロジェクトにおけるX線撮影の役割について，中でもHIVとの絡みで安定した写真の質を期待されていることや，良質の写真とは？ などについてお話しさせて頂きました。まず，理論的に理解することが大事ですが，現実的にはある程度の装置が不可欠です。この開会式の前にヤンゴン市内の病院や診療所を視察しましたが，ほとんどの所で自動現像機は無く，装置も古い日本製の装置（50年位前の）を使っていました。

まだまだこのような施設が大半で自動現像機は普及していません

このプロジェクトを通じて

これらを総合してみると，教育（国家資格が無い）などのソフト面と，装置などのハード面の両方を同時に強化していく必要がありますが，自国だけではどうにもならないので，日本を代表とする近隣のアジア諸国からのサポートが必要で，とりわけ結核予防会も海外にもう少し目を向ける必要があると感じました。例えば，検診施設から冬の閑散期を利用して技術支援のため放射線技師を途上国に派遣するとか，医師は結核研究所で研修を行っているようですが，途上国の放射線技師も結核研究所で研修ができるようなシステムを作るとか，また，ハード面では日本は今デジタル化の方向に移行しており，自動現像機も余ってくることが予想されるので寄付など検討の余地があると思います。

いずれにせよ政治が取り巻く環境のせいで，とても親切で前向きな国民性が生かせないのはとても残念です。ヤンゴンとは「戦いの終焉」という意味だそうで，早くその名の通り民主化を実現して欲しいと思います。

どこか昔の日本みたいで親近感の沸くこの国のために少しでもお役に立てた事を嬉しく思います。また，機会があれば是非協力させて頂きたいと思います。チェーズーティンパーディエ！（ありがとう）

ヤンゴンで一番大きなボージョー・アウン・サン・マーケット。
いつも大勢の人で賑わっています